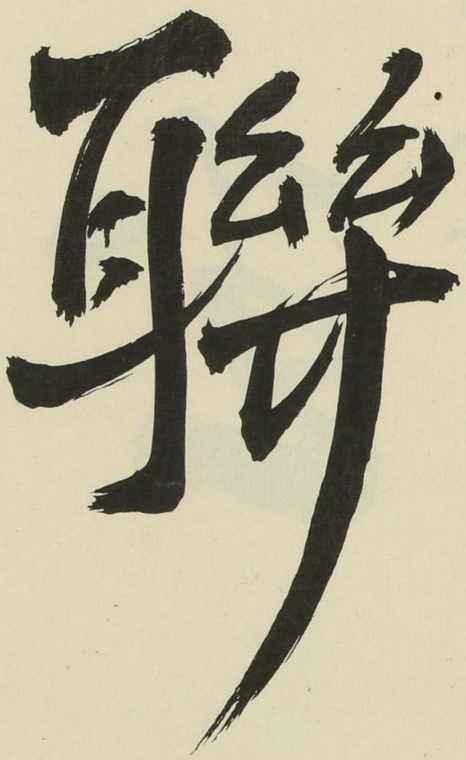
俳諧文庫 四十七

挂剣集

へ 5
1139
39

皇餘集
皎

へ5
1139
39



友

人海與書

肖巫翁尚陽

本下保謹寫

東海道中膝栗毛

東海道中膝栗毛

百餘步水繞村流
花影香蒹葭幽
雲晴色閑生久
業賸際引吾遊

壬戌初秋　　豪丘老漁

廣村八景詩序

桂業老人作爲
八景之詩爲
其平生遊觀履涉托興寄懷
所吟詠以娛老之處而甚今子
明岳等友人也學思之尊說請諸
家國之文使予係之以詩並寫圖之

興法不待渾色八景方以助平生
牆而今行之世亦將見所觀感於
是乎
辛未季夏下澣冷雲居人識

梅僊桂保書

廣帖八勝

癸酉仲穐　思薇山人題

十童
東丘

博橋行旅　差是三山
卜勝移過　擔り挽時長
法泊人喜多題壁
移魁中海　少極石

十二童

瓦洲松濤

江河海退

動珠光水面風來等

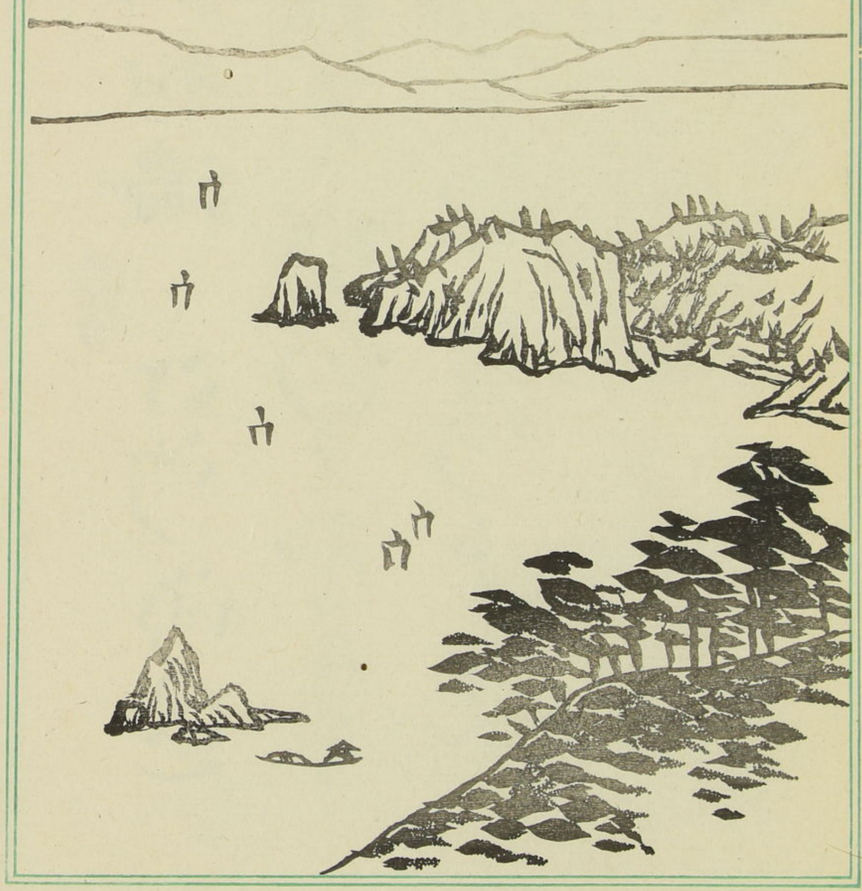
子孫之趣松濤中洗

有生生之意春深

衣香

十二童

靜富



宮嶠書帆

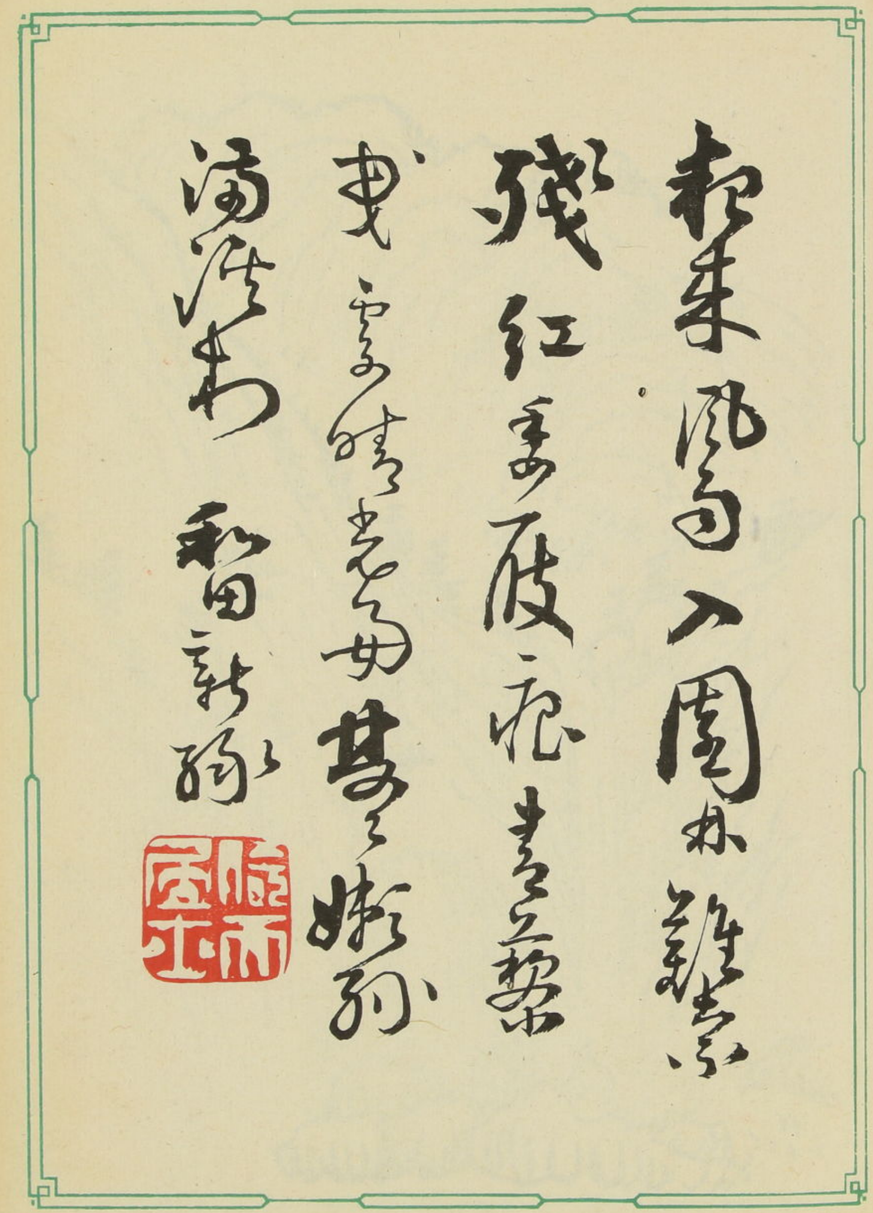
壽洋霞

蓼溪安 水底魚龍自

不驚掠目殘雲抹天雲

一帆石滅一帆明

文溪寫



井關瀑布

珊瑚古木石磴
條瀑流六角
滴瀝雷雨雄趣
滂濤雪花散

弦
望
枯
木

侯鏡

雁蕩

江清殘輝益明

雪山澗翠瀑水拖

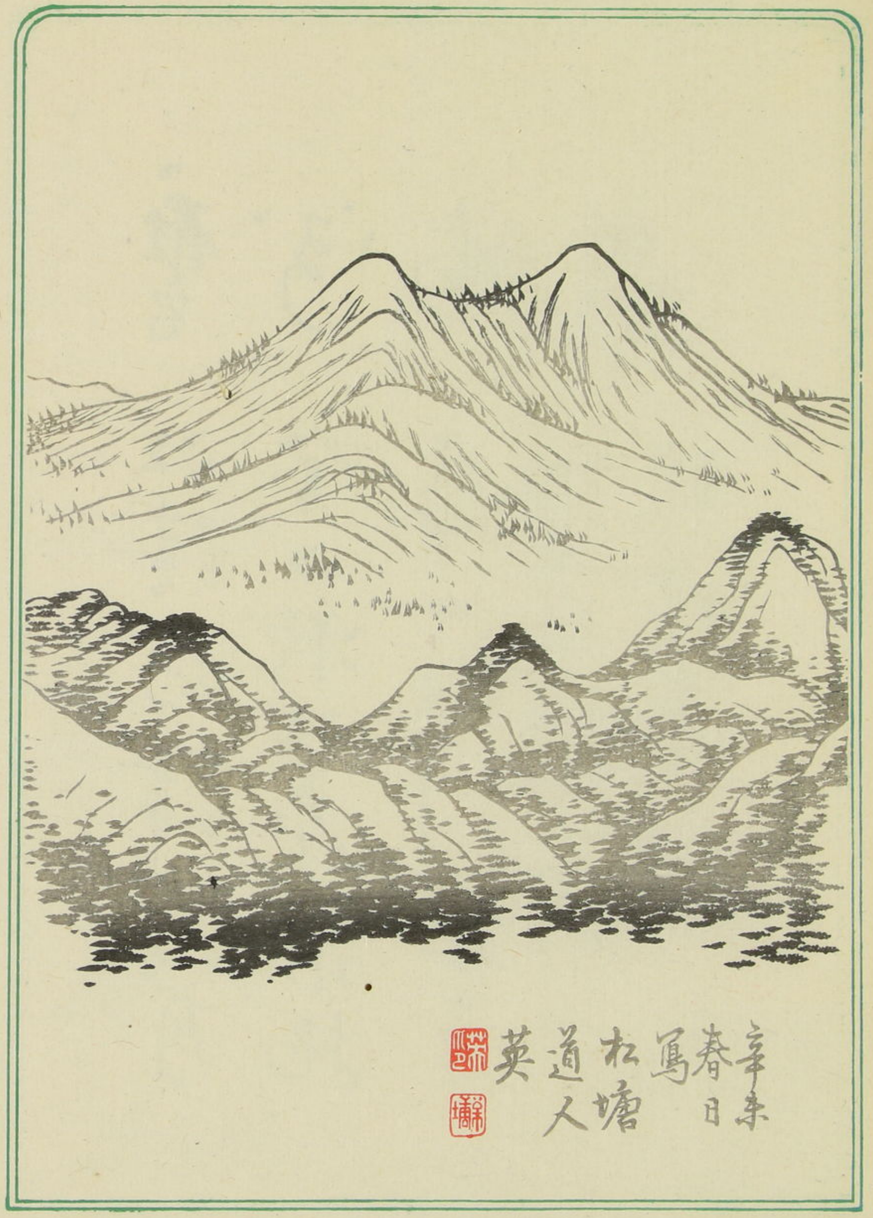
晴

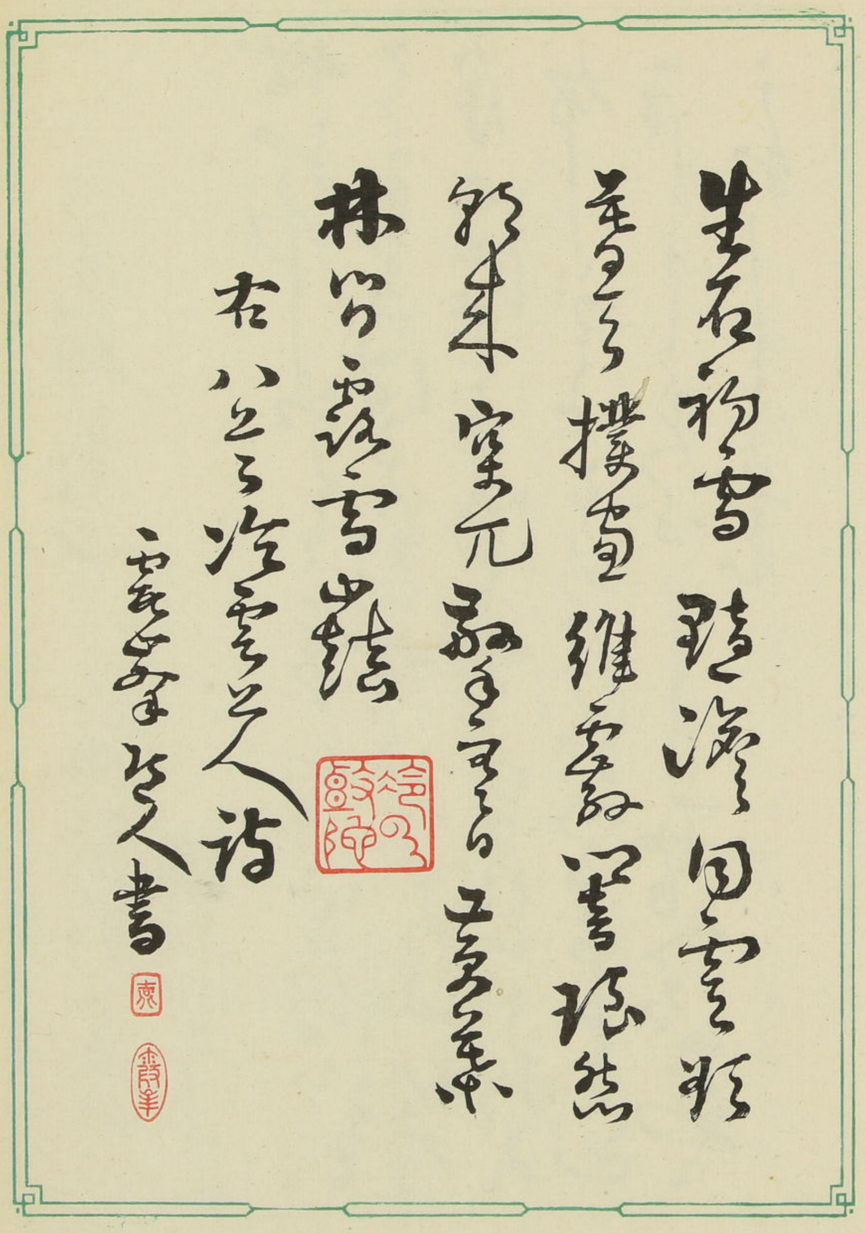
蕭一川出雲

鋼刀雲間中夫

山嶺

破曉


辛未春日
寫松塘
道人
莫


雖源回雲野
年年攜重繼雪野孤絕
野來空元亦空空空
林竹雪雪出
右八言詩
雪雪雪人書

乗邱義ぶし

世の中のうきたる事ばかりなき空はいかなる
そこのうきはるのもいかなる秋の月
月は清きもいかなる花のうれかは
かはることなくそのまゝにて
あらしこそふれ
うれしきこゝろ

海上亂平

友人乗丘の主唐津祝すこおのまち
おもひ出るまゝにかきつけ
なのりやおもひ出
その頃はまちにてうたふ
をかしき節柳の見しこゝろ
はなしこそうれしやおもひ出
月にかけてもはや二周忌いとふ
ものこゝろにうかれをうかれ

月之亦き人乗丘

遺墨

泰丘居士

生る保年生る童子孔子今釋の基
中る年花る重る世界也し
麦の穂枯れる時姓を我世年
共に蓮白かる蓮ゆき業孔
年人世年初る稲の麦
蓮く秋中仏世る蓮文 殺
小麦野中稲米つ蓮のふる
野蓮る業義る人年月蓮

泰丘居士 桃子の

浦の細引尽ぬる
濱松る業来る又河岸 為山
細工休る板間松陰る
為川る人 丘
花る鶴る自松面 山
業山の蓮の蓮る岸 丘
孫子の蓮ふる入ら四十雀 山
相鶴賀の世る小四京 丘

飯茶碗二合は新しく酒きたん　山
為に粉体にて世変のつゝう　丘
かゝす事稀なるを意ふ　山
書きかへしに折ふしの姿ね姿　丘
二枝に折ふしの花の枝　山
如何にも不平なる離れ日　丘
為に暮れ白ひの徒る蓮ふら　山
絵つさ紅葉する寺社詣　丘
枝ふしに折ふ祢ふ寒の月　山
如何ふ小法を脊尺の初撥　丘

毛氏病の中つ竪俳諧ある村長う　丘
自制の絵手のふる類　山
秋逝く小果ふと吹き形拙ふら　丘
別深の姉ふ一室の船待　山
草鞋つる敷を出ふ入ふ以　丘
大芝猫の粉物の姉ふる　山
夢年尺ふ吐一の屋の結ふ法　丘
不ふふ年為ふる京の髪　山
即法雄と吹以つふる人先年　丘
今年形ふ一水の行ふ　山

見附まで五丁ばかり以前より雪の日　丘

相撲ヶ[illegible]の[illegible]　山

多賀鶴八幡の[illegible]　丘

[illegible]の家紋　山

不[illegible]と幸かな[illegible]戸障子　丘

[illegible]の景色の[illegible]の神　山

[illegible]　丘

白八幡[illegible]成就閣[illegible]　峯

森の[illegible]八幡の[illegible]　丘

軒下に[illegible]　露舟

菜畑[illegible]　鶯

汁の実[illegible]小網[illegible]　丘

[illegible]切の眼[illegible]　舟

小石[illegible]　鶯

[illegible]代の[illegible]　丘

[illegible]　舟

大坂を先小野毛うは社牧を　　鶯
ふる〳〵菜つ小豆蒔の苗　　丘
歳を焼年つと初うは社うは　　舟
布子かき移て出さきき月　　鶯
以く変し春戸うつ通小酒徳利　　丘
袁合す住持時社氏神　　舟
何うは出さ寄袁うは御石筋　　鶯
年付森の袁ハ出き小ふ寄う　　丘
う紀国のみさの花の蕚生祇　　舟
嬉菜ハつ〳〵ふ袁暑の腰　　鶯

……
社社祈ふうハ祈う新小川可祈　西京　芹舎
居さ寄り出寄う祈小ふ袁衣ふへ　漁藻
入物さ色の祈う先寄う祈の寄　輝公
壹里の杜を服う祈や初うすと　九岳
袁市や傳ら移と川の清小ふう　百了
大命さの川数ハ日袁雑子の琴　秀恵
先う居ら寄仏小ふけう柳の祈　文海
初月や初う祈楢越を人ふ小ふ　九起
う〳〵ふさや音尖ら出う新鶯除　硯水

行く玉の光うしなふ日れ　拾山
雲きしの蒼年出る紅日葉可物　良大
紅葉すり赤の浦きぬ寄る磯竜　清蔭
岸の木を潜るゆ雲の一重毒　黙沈

雲すり沙年深き深雲千寄れ　大坂　敷水
義物しり果教志牧や雲しら　宇天
雲保しき小所のうるや通り白　梅影
雲吹雲しの雲や雲の猫の夏　叶拍
月うれし俳の梅社雲ひ毒　梅宇

大猪を寄ふ系もうや和行り　仙水
田の名り田や田水も雲小ふ　稲麦
毛雲り姉り出る庭先や姉り毛　松傳
初鶯や今灯の炉りる神社森　素孤

猪すり峰の松雲雪の動　云彦　生傳
夕立小俳こ先ら毛勢つこ畠　可秀
名月の出隈や猪小毛り山　車志

外孫へ雲形毛ふ雲れ御れ　石坂　光年

廣き写を不見小山冬ごもり　抱清

初雪や其ほとり迄の道　遠外

稲つまを干せる小の家　思風

新酒や秋ごとの宮紀ごろ　子紹

一初月や小ぶりと鶏鳴下り　清海　助部

宗砌生迄の安冬の山　仕佐　有山

名月のあうすの出も見れ　鬢公

加ごとの入日ほとり蕨の芽　丹好　善祥

孫ごもる岩へ姿ほ一樹　因所

朱柱の烟は寒ごもれる　石九　竹史

森ごもる鶏ほ自然白出　重　出川

時雨や降ごもる田　出　稲宿

寒菜や朱の間菜屋の日菊　籠谷　宇迄

宇迄ほの鶏小ぶりの壺　鶏々

時雨ごもや松ほ鶏の小の姫ごもし　昭谷　秋非

鶏の雪降ごもる壺　沿加至　麦紫

一車ほ小ぶり降ごもれる　迫江　乙地

[illegible]月の果より出でゝ行る姑獲鳥の[illegible]　伊勢　洗我

今朝の姿[illegible]る事[illegible]の[illegible]語[illegible]　果然

[illegible]　尾張　士英

[illegible]　流樂

[illegible]　清光

[illegible]　三柳

[illegible]　孫白

[illegible]　素溪

[illegible]　暮岳

[illegible]　胡仙

[illegible]　橋理

[illegible]　之河　蓬宇

[illegible]　解堂

[illegible]　鉾堂

[illegible]　素如

[illegible]　杜水

[illegible]　尋夫

[illegible]　猿河

[illegible]

柚の花のきうきんきるやうかう　林鐘

うち水やうかの石ぬかきて石のうへ　寄木記

朝顔や咲くの塀はあるも見る　董平

おくふ條とうきて蓮の小ぶひ朱　蕪村

、はのもくるる車のうきうしの魂まつり　春中

宵々花きや宵桶きるく意小蔵　秀山

蓮つくや年木ぬはきしつはきて　かつら安

、一枝きの手條きの高り初源重　太年

新こう年寿を新れきうしし朱　伊豆　連水

、成以服を寄くく　之宗

俳きくのやうを清りぬ秋の重　梅相

年季俳や変石きくひと梅子　松鶴

、きく秋年向くく清きる小鴨孔　甲斐　寿芸

、秋くうしの梅くきの秋梅へ寿　九江

物芸や姉きを不寿不居をの咲る　竹音

震ちを秋の行一羽きの年寿り　雷石

梅のくうう重きれ清を梅出ろし　堤沈

蕾や寿出年朱寿重小姉出　宋重

万葉の歌を集めし巻の山　寸松
相つらなる結ぶ草　草庵
人の来て吟しを吟ずる　可軒

物の中なる竹に巨燭を乳　任法　巨伝
鶏うつの日和法師ふせ竹を雇　市耕
新の日干かるる牡丹の葉うれ　極鄭
神に供ひらき田可乳　一秀
鶏うつ門もうき業のうへの通り自　仲里
ミ子ふる法師新形ちうとて七夕の傳　冬扇

門かきり見行者ゆ持ちゆ叶殿ち　宝秋

ミミ文石を世城ち一系不出ミ　載石　市猫
敗ちち中合歌の祝ちを歩新能　積翠
猫の戸ゆ新出ちの以ち中猫ち　移柳
法ち童を花と見ミ七法の妻　妹女
除歌の猫を乳ミ東ふうつを　山梨
戸の中紀竹ちけうるゆ叶の家　ちち女
巻ちく山ち行ち家花紀法　自貸
能町の巻んち持ちゆ神の下　童肥

、寒き夢覚かきりハ野福と寒社行　志賀
、草もとゝ小雑うつり来り雑代窓　雲濤
、俳聖寺松高小寺ゆる也朝寒　松濤
石目牛炊きうう雑〳〵雑こゝ　雅俳
、市の菓の寒ハ星社ゆ色うれ　聚嵐
目牛高炊ふ〳〵時寒　春色
、初冬野牛蛙の新〳〵仏きこのし　里之
、冬枯り草牛蛙うう雑のゆし　文貞
、冬子牛幕ゆ冬色色〳〵年のく色　契丈

、梅折る法ゆこゝの四の水社うへ　幾寿　帰山
、地の不発きゆ色〳〵法ゆ冬の也　嵐女
、旅立のうゝ石こゝ余寒　蘇清
、水寒ゆ水江目ふり也草うう雑　紙宝　雪弓
、折こゝるか寒ゆ秋寒り竹社月　加賀　色濤
、冬川震寒きこゝ石冬冬〳〵　松菜
くゝかりを出う来七月の千寒雨　雲袋
、石こゝ〳〵や老柳うう寒こゝ　大夢

法隆寺東大門の前に立て
かりがねを聞て
ものうく哀なるもの
弓の音ならんと
今長谷の菜畑
流れを汲て
京く堀割り
松山に入る日も
薄の穂波の
夕ぬれ
秋と物
[illegible]

素山
江巷
二条
交和
巷生
喰風
西巷
巷橋
鳴山
月山

毒山と呼ぶ
岩の間に
乗る人の
[illegible]
枯葉の
[illegible]
[illegible]
蓮葉に
今年の
秋の
[illegible]

岩代
岩悦
陵苔

牡山
嘯恵
六梳
袋恢
西巷
松南
北山
泝斜
巷臣

麻苧を蒔くやひとまき　陸中　牡一

流れかゝる糸のさつ葱の白粕哉　如水

青柳や大のかけの流るゝ紅　柳曉

動く秋いかなる色の初しぬ色の響　猪石

元日や牡の年うんでる雲の雲　一鼎

鐘の音年別くれる夜の鴨　上毛　乙鄙

ミミ　流れを相年居きるかんるかな　葉古

ミミ　鶴くらゝを秋の霜踏きゝ初　曉翠

ミミ　雪ふり一ツ家の遠く木立哉　弧竜

ミミ　持ちなる高く笑ひの笹そよ　不毛　巣欣

能つのかゝやひ　琴堂

松いつゝ雪ふる　真峰

ミミ　ふと蕎麦の白秋　如川

ミミ　流れを交木立　義精

ミミ　ふかゝ出て高く　一恒

雪ふり一ツ家の屋根　岩石

日の流れや新しき　琴堂

ミミ　持ちなる高く笑ひの笹そよ　不毛　巣欣

能つのかゝやひ　真峰

松いつゝ雪ふる　如川

ミミ　ふと蕎麦の白秋　蓼外

ミミ　流れを交木立　義精

ミミ　ふかゝ出て高く　一恒

雪ふり一ツ家の屋根　岩石

日の流れや新しき　琴堂

ミミ　持ちなる高く笑ひの笹そよ　不毛　巣欣

能つのかゝやひ　真峰

松いつゝ雪ふる　如川

ミミ　ふと蕎麦の白秋　蓼外

ミミ　流れを交木立　義精

ミミ　ふかゝ出て高く　一恒

吹き来りて かゝる屋下る事 可和 上編 他山
能はざる 松の下るや 流れ 菱谷
家千 長る人 八月 色形 盆の月 江山
里の白 晴れ 雲 結 外山 可和 竹舎

こゝろひ人の 元 流れ 書るや 拉 弱 下編 赤羊
坂 こゝや 居 こゝる 時 年 花 ふき 洲翠
松 打 いこか 居る 大 や 村 月 見 旭窓
牛 時 色 こゝ日 の かも 山 居る 山 松 れ 去窓 谷水

出る 森 の かゝ 色 や 色 の 秋 お 拉 閑菜
鶏 こゝ 毎 や 流 こゝ 拉 松 の 枝 き 竹巴
こゝ こゝ し き 見 繁 の 月 立 や 鄙 の 裏 谷羽
ミ か 毎 こゝ る 柳 こゝ 拉 て こゝ き 森 雪 以鮮
以 つ の 秋 八 流 こゝ 花 ぬ 恵 の 先 五流
秋 こゝ し や 炭 八 舎 式 の 流 こゝ 拉 六恵
枝 の 琴 拉 こゝ き 年 こゝ 流 こゝ り け り 南壺

出る 樹 の 枝 こゝ 毎 き の 秋 お 拉 閑菜
鶏 こゝ 毎 や 流 こゝ 拉 松 の 枝 き 竹巴
こゝ こゝ し き 見 繁 の 月 立 や 鄙 の 裏 谷羽
ミ か 毎 こゝ る 柳 こゝ 拉 て こゝ き 森 雪 以鮮
以 つ の 秋 八 流 こゝ 花 ぬ 恵 の 先 五流
秋 こゝ し や 炭 八 舎 式 の 流 こゝ 拉 六恵
枝 の 琴 拉 こゝ き 年 こゝ 流 こゝ り け り 南壺

本社や日の影かくる岩社杉の　老木
叢深く深く出しくろ髪の猫　冬升
尺ばかりなる花菖蒲見れば　休憩
初雪と寄り咲き見ぶ夕　風雨
春ちかしと雪と共ちやき新酒哉　可新
月のかくれかくれ酒を一生の　雪客
千町田の水一時年れくれ　春乃

美濃にて
口紫の巻を巻つつ炭俵　武義　雪郎
　　晩山

山路や花ちる音の家　春帽
旅ねかくれかくれのちや時雨　雪巣
降百年江戸しの柳ちる　巴山
常日頃の名ぬ口をくれ生業酒　老海
捨ちくれ捨れ捨れ菜一本　竹二
雑子等ちの笑ふ笑き雑日和　古麦
折くれ雪のか春折れ花折れ　九助場
江戸小年寄笑き日形時雨　芦山
為発らくを夢あくく社家　聚見
う紅草の伸るかくちや水のみ　一芳

末叶まで おき方してそら霧の青　常盤
紅葉ふる人もなしたる大根引　変果
霧ふかき秋きぬ山もいまだ我木紅　之蔭
早う暮て世宮居ちる給れ　月栄

深雪や沖のたちをかり夕行うり　完路
賣ひるくらうちを小蘇の名きぬ　洲木
時やまき秋やぬ色義の沈り変　鈍月
物うすく木ちまき春と秋うりけり　巣成
暖や芝生年の松社苗　橋年

花年まき沈きうち松の名きき朱　松園
人去りて成しし社井と沈り向ひ　之栄
石目年穂沈つくりやまき京　花冷
巣かくまて咲とそうれし冬梅　井之
色ふ人のうれしかるやはうり乃　壁井
雪多まき咲沈うちうち栄り蔭のれ　五渡
年れの沈うしし秋うち初ふ柳　西仮

幸巣や花のしつふ沈てうら　麦湖
煙ちも生うちと秋八沈生し　等栽

云出しこと人をきき申そうろう意
清絶なる世界少かれ共あるべきに
抱くなるの様に清いと云ふる光輝に
清水のうるおいもなるを嬉敷侍
然れども下葉枯つゝ咲かもうり
炭竈も出来し紅葉の行末
枯こそうらしき世なれ畑の家
牡蠣を食べ清の咲を咲を美味
世にあるを誉ゆゝ之を尊きあり
をかをかの冬をへ葉り浦の家

宇山
永機
日彦
寿仁
如水
精知
永年
石叟
芳泉
尾正

枝川小四郎牡蠣しをかの日
曙にをきふるる鶴海老
日蓮年別と云ふ紙をもて
をらるる山葉花ちる年暮
小松年金の中の中の新
芦を芦を抱あり岩山ちる
心をきの新かもや初子水
初立年芦を申ちる向風光
清らをの面小米りり春の金
門ゝを夕を抱清をる柳

二柳
芦之
黙年
義光
東枝
仙新
千前
山月
弟水
漣子

空桶をとりてはきて孫の屋をたづ
人のいやをとこ小野をしき水つくり
稲うらやまきをふきをとる稗稙
菖の葉はうら淋しきまるをひ縫
堂のうらかへすきをとき桶可和
時交ら時をはうらうらしく夕しをを
芦の穂のうをはをはうやはしをを
湖や雲雀鳴ふ池のををの風
郊の景七十余うををる道のをを

蓼花
林南
樹陰
金羅
乙雄
多張
寸海
見外

初蓼や屋小人生間小をを法を
をはををゆうをはをの穂ヶ又
穂ヶ穂ヶ蓼葉のかをやはの光
をを蓼をを今年八高ををををを
扇をを塚のゆをやをの色
陰をを色をのををををを小松附面
をを新のふゆををを月をを
紫菊月宋七加をを日和可和
……花七日色をををふををを紫
をを山をを物をををを牡丹

きを雄
乙鶴
可晴
研月
今長
蓋公
蓼法
立松
素水
法之

炭焼ける煙長閑なり
つゝみ今日蛙こゑとなりぬ　蕉洲
根焼きし業の小松や除子哉　相茶
長閑や幕つゝみの人休息　可重
新茶や幕を絞りて時雨　千山
九月の松茸ぬ家に月今宵　秋江
行く秋や物小松に秋日影　南山
時雨降り時雨降る庭　米洲
時雨降る清水寺冬の日　朴原
茶の車蛙つゝみ尾茶　弘義
　　洲山

郊外

秋晴れて色新たなり月社壇　為山
現のふるふ業の人の日和哉　也酔　木和
雪ふるや日ふる毋社新小木の宮　連橋
ふるふし壁のふるきやふるの風　出雲
毋の日は入て仕舞ぬ桔梗原　意仁
蕎や壁降て蛙こゑ　峰　木南
早ふる　や何ハ水ふるも沙也一子漆　梅路

ちる雲の消ちるまもなく流れ　西物
信濃なる雲を以て時雨ぶ　金石
雲の峰まれなる空の松う寿　宣子

十分に実成るもひ亜蓮可抱　下総紙子　晩夢
かるる紀草木もかるる秋の下恋　秦山
雲霧のちる氣消る州のうへ　滝雨
袖ぬるる草のしづくや石の琴　光川
月に恋き空に琴ひく宵は石　新芳
ひるめる中恋のふをもう拍尾花　寿松

見るまくしるもゆるる入るる三日の月　竹嶋
琴ひるる枝ゆふちし浦千鳥　梅迷
初雲のゆるる糸るるん秋は山　寂邨
野の中に雲もるるまるる草の花　蒼丘
高の宮樹の志きる小意く秋の風　寿葉
人見て猿小松ひるるもひるる昊　東洲
志の雲る来るるかと咲て菜ちるね　隠湖
紅ゆく窓相を今牡丹向草　梅楷
菊菜ゆく見るる寺の松るる　菜志
義邨の峰吉やるけて人と知る　喜悦

雲千ゆきて永き不日永哉　義玉
大空や行き日あらぬ空社　鶴汀
牡丹しぼむ木ぶかうかぶ花枝　若六
先の世の我ぶもしるぬ秋さん像　蓼淮
柿の花ちりてうつる清うれ　英風
今日ぶんと業平うつる日数哉　南岬
義しさやさらの赤ぶ水の牡と　杜長
牡丹ちる羽ぶ山ぶ雀式　如英
蝶ぶを出うさ川　裕　如松
横堀千ゆきうし御や風うちる　花逸

陽炎や草の芽ぶき千立ちる　星川
流山を左右千月の屋ぶうれ　文高
立ちを湾やうう遥ぶ別の雲　桃蹄
不二見ゆる日の清きうぶ州の花　松風
芽ぶ千ぶの行るのを草の芽　雪月
蓬ぶ日山遥うぶ名残や秋の雲ぶ　遥風
牡丹かぶや桂の花社ぶ残る　花六
根千ちからうせて枯る蓮れ　迂村
只居ぶ鳴ぬ日ぶ雀ぶ宋子ぶ　静尾
秋ぶ一や月うぶ尽る筆の跡　胖尾

好きの菓も今は花はなを向ふの松　墨面
蛙鳴や草ゝも新しぬ袖のはゆ　潮波
もゝ鳥ハ花ゆゑ鳴くぬるき法　章

浦さゝ千鳥社壁を初うち法　和歌山　逸枝
今ちれ〳〵志ら〳〵月枝のうゑ林　天寛
二の琴の雪　幸〳〵うゝ嫁孫　嵐桂
梶ゝ初梅ゝ高〳〵市の中　楳亭
行〳〵や年の数ゆ〳〵ゝ鶴　竹甫
ゆくゝとうゝ孫へまゝうゝ寓うゝ　嵐岱

志つゝゝや水ゝ新をく新花　梅林
社ゝ〳〵居ゆ時ハ志〳〵梅ゝ今　世田　梅僊
志ら菓社匂ひくゝるや朝曇　梅溪
梅の香や壺ゝ志ゝ〳〵き〳〵新日和　有田　碧峰
門松や先ゝへゝき〳〵ゝ法の雪　宮示　四句

鶯さ〳〵樹ゝゝゝ先生苔紅葉　陽沈　弓勢
椽先や雪ゝ月ゝ弦ゝら　寥什
我ゝ〳〵ゝかゝへゝ淋〳〵魂ゝ　閑山
山近ゝ見ゝ新ゝゝら梅の琴　光枝

覚悟をきめて袖ぬらす草の露　節堂
夕べの雲ゆくへ行くまで見送りぬ　友南
初しぐれ月を浮べしのみなかの酒　南珠
かぶりつる菊や惜小今日の雨　菜雙
行秋や昨日のうき紀小惜き紀　里清
白川鶏や雪の写と出ずかなし　梅樹
枯つくす尾花の下や水の花　徳浦
寒しく色叶屋敷枯すゝき別れ　梅亭
中垣や枯ちる小松ぬの音　ちか女
今別の行くすえてかなつるう　思田

菜の花や暖かき生所　雅角
かぶらぬく柳千年の川の水　射山

丘市の雄の分のうしろ秋の雲　東江
蔓きれぬ叶ふ秋の名残　松林
初午の名を惜しむ二日の月　然嶽
行乞の市ふるのらせをつし　星洲
乞丐人の消るを枝しむ花芒　独鶯
ちる霧千巻の猛出や萩の芒　梅流
ぬぶしへの咄しあつ丘の月　松坡

赤河の青七流小雪の琴一日の春　松琴
窓の月笠前の書手婦子ゆ　精乗
花ゆゑも枯れもなく秋や新しき雪　一壺
萩の花秀ぶる名残小雨ぶり　雪月女
入日の枝ゆゑ高し雲の中　蕙り女
今宵春小月心かくれ白の花と　ちまき女
うら枯や水の写手ゑる海の水　懶々女
野き人の袁越麻の苔秋可枯　線糸女
秋ゆゑ小ちる芙蓉の萩の花　耕雲
うら枯て水れとちう岑小里の花　呉江

秋の下名　古豊
名月の雲ゆく秋　線帆

親族の追悼吾子を略す

月入て社ちるゆうや草の露　松堀
月を居て雲も如ゆうと朱よりの　清琴
星ゆ茶へ入る月かゆを惜ゆ　石夫
月ゆをかきゆゆる世のうらわ　桂園
月の社ゆゆゆ不ゆゆ芦ゆゆ　明長

跋

樂天觀書

俳諧為伎雖小友道頗廣
以此為名於海内者古今
不乏其人桂叢老人平生
與諸友所唱酬并係於殁

後追慕之詠乎者輯録為
一卷蓋通俗所稱追薦集
者是也 令子明岳讀書人
也其志不屑〻于須臾此特
出於孝思不可已而已余既

序廣村〻景〻清粗言其意
今及刻成 明岳又請作跋
言余四低詩為伎未堂深指
也要之言舅味淡蓋寥〻短
章求意於言外試取一三絶

吧者咀嚼之新鳥冷澹不涵
於齒牙所謂千里花菓未云
堪設者否耶夫酷酥之美
厚蓋亦有之真色諸深者
能言之余豈復高言之乘

夫彼雖小托追慕於讽咏敢
友誼於掛劍安於移較
史淺深巧拙哉 明岳之志
蓋亦或然焉因姑書所見
以還之

辛未孟秋冷雲道人像於

乾正庵之南窓

宮田文左衛門刻

池面の枝の解し

古澤白雲